

(藪 陽介)

スケッチの能力の育成を目指して

学習指導要領では、中学生として身に付けたい確かな力のひとつとして「スケッチの能力」があげられている。中学校美術の履修で公的な美術教育の機会を失う可能性のある生徒たちにとって、「ものをみて描く力」をある程度のレベルまでつけることも、必要なことのひとつだと捉えている。また、中学校になり美術嫌いが増えてくる理由の一つも、「絵が下手である」ことが大きく、その下手の内容として「見たように描けない」ことが要因となっている。思春期の彼らにとって人（の作品）と比べ、自分のものを卑下して見てしまうことも考えられるだろう。このことは、見て判断する力がついてきたことの裏返しではあるが、本校では、小学校からあがってきたばかりの1年生の4月から、段階を追って「ものをみて描く力」をつけることができるよう年間指導計画を作成している。

1 「鉛筆と消しゴムの使い方」の実習

「絵がうまく描けない」と感じている生徒の描き方を見てみると、鉛筆と消しゴムの使い方がうまくいっていない場合がある。もちろんそれは時と場合によるが、正確にかたちを写し取るような描写の場合においても、強い筆圧で一筆書きに描いたり、うまくいかないと（よい線が引けないと）全てを消してまた最初からのやり直しになってしまったりということが多い。また、自信のない弱い筆圧で細切れに線を引くやり方はいけない、と習った場合もある。

この実習は「フリーハンドで、できるだけ正確に円を描く」というものである。円を課題としたのは、誰もが（正確かどうか）判断しやすい形であることである。まず、何も言わずに描かせてみる。大きさのみ指1本分の直径ということ伝える。これは小さすぎても大きすぎても描きづらいためである。その後、手順に6段階あることを伝えもう一度描かせ、その違いを実感させる。私の考える「鉛筆と消しゴムの使い方」は次の6段階である。

薄く描いてみる

消さずに修正する

はみ出した部分を整えながら消す

（よい線だけが残ったら）強くなぞる

全体を消す

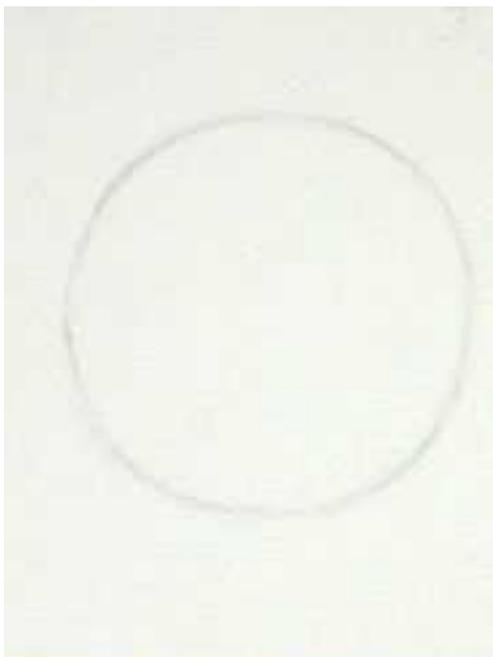
で描いた線をもう一度描き直す



1. だいたいの形をかいてみる



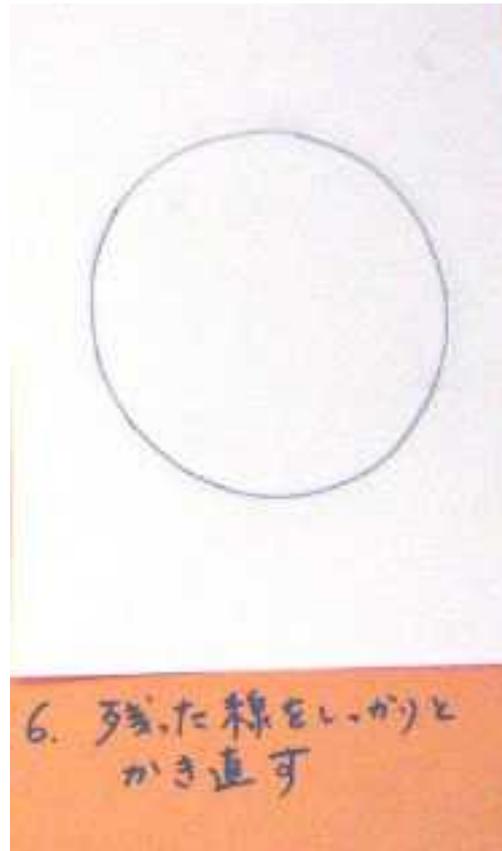
2. 消さずに形を整えていく



3. はみ出したところを消し、
線の幅を小さくしていく



4. 1本の線で濃くかく



3次元を2次元に 2次元を2次元に

風景画や静物画、その他物を見て描く場合の多くは、立体物を平面上に描く行為である。これは言い換えれば「3次元を2次元に」置き換えることになる。これは、一言で「絵を描く」といってしまえば単純であるが、非常に知的で特殊な能力を要する行為である。3次元である物を一旦頭の中で2次元として捉え直す必要があるからである。

私はその技術を習得する前に2次元を2次元に、すなわち平面を平面に写す（平たく言えば模写）能力をつけることが先決だと考える。その技術をつけるためにさらに細分化したスモールステップを設け実践している。

2 升目を利用して絵を写す

<実践例 1>

1年生最初の題材として「絵文字(デザイン)」を採り上げている。よく行われている題材であるが、大きな目標の一つに「明朝体、ゴシック体などの文字を正確に写す」ことを掲げている。

その際、ワープロで予め大きめに印刷しておいた文字に升目を引き、生徒にも用紙に升目を引かせその升目をたよりに文字の線を引いていく。指導計画は次の3段階である。

- ・「永(永字八方/明朝・ゴシック)」
- ・自分の名前(明朝・ゴシック)
- ・絵文字(アイデアをできるだけ出した中から2つの文字を選択/明朝またはゴシック)

スモールステップの設定

升目を利用して絵を写す際、それをどう生かすのかという観点で3つの項目を設定している。

ア 升目線のどこを交差するのか、その分割比を見る

イ 升目で分割された一つのスペースの中で、作られる形を比較する

ウ 対象線のなかの（升目を交差していなくても）特徴的な部分を座標と捉え、升目の中における位置を把握する

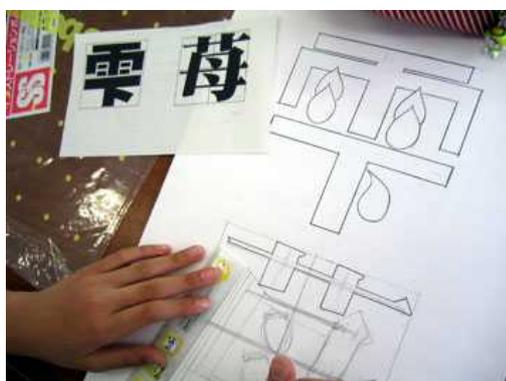


ア

イ

ウ

*イは心理学でいう「図と地」の考えを応用したものである。生徒は描こうとしているもの（図）の形ばかりに目がいってしまう傾向にある。その場合、背景（地）は形として認識されていない。そこで「背景の部分」を、「描こうとする対象物」として置き換えて見る（いわゆる図地逆転）ことにより、より正確に形を捉えるというものである。



<実践例 2>

1年生の後半の題材として「模写にいたずら（絵画）」を行っている。今までの技術を応用して、より複雑なものを模写し「見て写す力」を付けようというものである。授業の構成は以下の通りである。

- ・教科書や副読本のなかから自分が気に入った絵（描いてみたい絵）を選んで模写をする。
- ・支持体（ワトソンボード）の縦横比に合わせ、模写する絵をトリミングする。
- ・基本的には模写する絵と支持体（ワトソンボード）の両方を同じように8分割し升目線を入れ、それを利用して模写する。
- ・各自のオリジナル性を出すために、模写する絵の中にいたずらを加筆する。

* 「いたずら」の発想の元にあったのはマルセル・デュシャンの「L.H.O.Q.Q」であるが、私が条件として出しているのは、ただひげを付け加えるという単純ないたずらではなく、その絵でしかあり得ないような（描き込んであるものを別のものにすり替えるというような）いたずらである。

<実践例 3>

選択美術（基礎コース）の題材として身の回りのものを描くことを行っている。これは前出の「3次元を2次元に」の実践である。本校は1学年から3学年まで選択授業を展開しているが、全学年を通して実践している。

1年「身の回りの小物を描く」

2年「自画像を描く」

3年「風景を描く」

その全てにおいて鏡を利用している。対象物を一端鏡に写し、その鏡を見て絵を描いている。鏡に映るものは平面（2次元）である。すなわち3次元のものを2次元にして見せることで、通常頭の中で変換作業を行うべきところを略し、描きやすくさせているのである。この作業を継続していくことで、やがて鏡を用いなくとも、目で直接見たものを2次的に捉えるようになるものと考えられる。

また、その際も鏡に升目を引き、それを利用しながら支持体（ケントボード）に描いている。



3 今後の課題

3年間を見通して系統的・発展的に題材を配置することで、生徒の「描く力」は徐々に伸びてきたように思う。今後も誰もが一定の「ものをみて描く力」をつけることで、自信をもち、生涯にわたり美術を楽しもうとする態度を育てていくことができればよいと思う。

さらなる課題として、生涯にわたり美的に生活していこうとする態度を育てるための実践を積み上げていきたいと考える。現在の図工・美術教育は、義務教育卒業後生活にどう生かされているか、という批判がある。しかし、美術という教科を通して豊かでよりよい生活を送っていこうとする心情を育てることが、これからの美術教育の目指すべき方向性ではないかと感じている。鑑賞学習を含めた生活に生きる題材開発をはじめとしてこの実践を探っていきたいと考える。

<参考文献>

『脳の右側で描け』エルテ出版

ベティ エドワーズ (著), Betty Edwards (原著), 北村 孝一 (翻訳)

『内なる画家の眼 創造性の活性化は可能か』

ベティ エドワーズ (著), 北村 孝一 (翻訳)

「分裂から統合へ -学校美術教育の現状と課題-」新井 哲夫

教育美術 2005 1月号 (財)教育美術振興会